人文学報 No. 517-2（社会人類学分野 14）
東京都立大学人文科学研究科、2021. 3

身近な言葉をきく
――2020年度「社会人類学演習Ⅱ」のインタビュー作品――

深　山　直　子

田沼幸子と深山直子が共同で担当する「社会人類学演習Ⅱ」は、図らずもコロナ渦において記念すべき5年目を迎えることになった。というのも、本学において新設された、「教育の質の改善に貢献が認められる優れた取組」に対して授与される『2019年度東京都立大学ベスト・ティーチング・アワード』を、担当者2人が、厳正な審査を経て2020年9月に受領したからである。

本授業は、人類学的なフィールドワークの基本的な知識と技術の獲得を目的している。それを、遠方におもむき共同調査を実施するなどといったかたちではなく、通常の授業形態で、すなわち週1度90分の授業という枠組みのなかで達成するには、いろいろな試行錯誤があった。次第に、①定点観察、②インタビュー調査、③映像撮影の3手法を主軸とした内容、各自が授業外の時間で課題をこなしその結果を授業内でみなで検討することを重視するスタイルに落ち着いていった。授業に熱心に参加し、真剣に課題に取り組んだ学生と、インタラクティブなやりとりがあったからこそ、評価されるに値する授業に鍛錬されたものと考える。この場を借りて、これまで「社会人類学演習Ⅱ」に参加してくれた学生、そしてサポートしてくれたTA全てに、感謝の意を伝えたい。

さて、コロナ渦によって、2020年度の南大沢キャンパスでは、授業がほぼ全面的にオンライン化した。この授業では、多くの他の授業がそうであったように、Zoomというウェブ上ミーティングのシステムを用いたリアルタイム方式、すなわちオンライン上のバーチャルな「教室」に週1回みなが集まるという方式を採用した。例年は、前期に①定点観察、②インタビュー調査、後期に③映像撮影を実施するのだが、①は②以上に外出する必要が生じるだろうということで、状況の改善を願いつつ後期にまわし、前期は②を実施した。

学生は最初の課題として、6月よりインタビュー調査に取り組むことになったわけだが、感染症対策に細心の注意を払うよう伝えたため、例年以上に家族や近しい友人をその対象に選ぶものが多かったという印象である。Zoomの使用も許可したので、13人中4人がZoomを活用したことも、今年度ならではだろう。なお各作品は、第三者が読み得る内容になっているか、という観点から、学生間で相互に検討し、教員が助言したうえで、推敲されたものである。

いずれの作品も、よく知る間柄「だからこそ」、「にもかかわらず」、という内容に

あふれており、非常に味わい深い。学生には、調査対象者の言葉を中心に据えつつも、かれら自身の存在を消す必要はないと指導していることもあって、対象者1人の語りを噛みしめることもできるが、2人の間柄を想像することも楽しい。なお、インタビュー調査およびそれに基づく作品の公表については、学生各自が相手と合意形成をしたうえで許可を得ている。

13作品を「Ⅰ　家族に聴く」（鎌田・佐藤・菅原・諏訪・千葉・東・森）、「Ⅱ　友人に聴く」（青木・岩田・斉藤・坂口・圓明・松本）の2部に分けてお届けする。

Ⅰ　家族にきく

話すこと、聞くこと、友人であること、鏡であること

鎌田　菜摘

50代の母は、自分の友達の話をよくするが、私はほとんどの人に会ったことがなく、よく知らない。中学から大学までそれぞれの学校での友人がいて、月に一度のペースで彼女らの話を聞かせてくれる。遠方なので時々しか会えない人もいるという。それでも、少なくともシーズンごとに近況を報告しあい、今でも1年に一度のペースで会う。会うと時間を忘れるほど話をする。学生時代にたくさん話した友達は、大切な分岐点さえ聞いておけば、基本がわかっているから、だいたいどんな生活をしていたか想像がつくのだと少し誇らしげだ。

いつものように夕ご飯を食べ終えて、インタビューを始めた。たくさんの友人について話し始めると、友人との会話をそのまま再現するからか、母は出身地の関西弁に戻った。私は、直接知らない母の友人について話をされることに疑問を持っていたので、この機会に率直に聞いてみた。

「なぜ話すの？」するとまず、笑顔で答えた。「私、友達のことが好きだから。友達といると楽しいから。」しかしそのあと、かなり間をあけて考え、「あなたに足りないんじゃないかなと思って話すか怒るかしている」、と少し諭すような口調になった。

どの友達も母に相談し、母は聞き役に回ることが多いようだった。おしゃべり好きな人が聞き役に回るとは意外だ。小さい頃から、その日にあったあらゆることを話す母は、祖母に「娘のことでわからないことはない」と豪語させた。

「どうして聞く側になるの？」と尋ねると、「人の話を聞くから、人の話を聞くのが好きだから」と即答した。

彼女が天職だという仕事では、人の相談を聞いて整理し、解決する。友人には同業者も多い。関西の進学校出身で、「真面目」さや「ふつうの女の子」という特徴を共有していたそうだ。「友人の相談相手をすることと仕事につながりは？」と聞いた。

相手に聞いたことを鏡のように映して相手に見せている。（相手は：筆者補足）自分ではしゃべってるときに（自分が：筆者補足）見えてないねん。しゃべっている人はひたすらしゃべることで、私という他人が聞いているとか見ているという状態をもって気づくことがあったり解消したり、何かしていくんねん。

そして続けた。「話を聞く仕事ではあるけれど、話すことも必要な仕事。どんどん話せば相手の言うことに連関が出てきては話が広がり整理される。友達も同じ」。

そのままを映す鏡になるには相手の言葉をよく聞くことが必要ではないだろうか。しかし気が強めな母は少し押し付けがましくなったり、聞くことがおろそかになったりしないのか気になった。

確かに話すことが好きだと聞くことがおろそかになるかもね。でも、自分がさらけ出すと相手も抵抗が低くなるので無口な人もしゃべりだす。（中略）基本的に負の部分をぶつけてくる人が一切いない。ブラックホールに闇は投げられないけど、『なんだこんな人だったのか』と思われるような接し方を（私に対して：筆者補足）したくないとみんな思うんかな。

まっすぐ反射させる鏡といえば、万物を吸収するブラックホールとは矛盾するように感じるが、どういうことなのだろう。いろいろ語ってもらったが、ついにわからなかった。母は、友人達と共有する「普通」さや「真面目」さについて、自身の父母のことを振り返って話し始めた。標準語になっていた。

自分はお母さんに苦しい方と楽な方なら、つらいほうを選ぶように育てられてきた。（中略）家事も仕事もうまくない気が利かないグランパ（母の父のこと：筆者補足）の性質が自分にもあるんだと、（中略）グランパをアンチテーゼにして生きてきた。自分のことを映してみる鏡が全部（夫の愚痴をこぼす：筆者補足）お母さんだったからそれはすごく幸せなことだったと思う。（3兄弟の中で女ひとり：筆者補足）あなたがしなきゃいけないって言われて、家事もぜんぶやっていた。習い事も全てひとり続けた。

振り返って「幸せ」だったと言ってみても、当時は簡単なことではなかったのだろう。だが母が言う様に、彼女が誰かの役に立ってきたことを受け止めてくれた同級生たちは、50年支え合い、友達として残ってきたのだ。

これからも、友達によっては死活問題だから生きていく手伝いをするし、必要なら精神的に支える。一生支えたいって思う子もいる。（中略）一生懸命、人のこ

とをやっている人はほかの人が助けてくれる。100人中2人かもしれないけれどそれで充分。

最後の母の言葉に気負いを感じた。正直なところ、母はなぜこれほど「自分がしなければ」と感じずにはいられないのだろうと不思議に思う。

私はいまだ「鏡」を分からない が、真面目に生きてきたと自ら振り返る、自負が関わっているような気がした。友人たちがこれからも変わらず母を大切にしてくれることを願った。

「私は私として、生きていくんよ」

佐藤　菜月

6月後半。この日、東京は日中の気温が30度近くまで上がったが、母のいる地元大分県でもかなりの暑さになったようだ。

「今日もしんけん（大分県の方言。とても、すごく、のように強調させる意味がある：筆者補足）、暑いねえ」と、母は画面越しにパタパタと顔を扇いだ。私と母は、コロナウイルスの影響で直接顔を合わせることがかなわなかった。そのため、初めて使うZoom（ビデオチャットアプリ）に慌てふためいていたのだが、すぐにリラックスした表情を見せた。

幼い時から母はよく学校での生徒のかわいらしい言動について話していたが、それはこの日も変わらない。「こないだはさ、いろんな物の長さを測ったんやけど、『長さっち足し算できるんよ』っち言ったらさ、『ええー！！』っちみんな驚くんよ、（中略）しんけん可愛いやろ、こういうことに感動を覚えんと続けていけんよね」。

息をつく間もなく、あの子は、この子は、とまるでその生徒になったかのように歓声を上げながら、目を輝かせて母は話し続けた。

母が小学校の教師になって30年になる。一見明るく活動的な印象を与える母は、11年前から鬱病と闘っている。約1年間の休職期間を設けたこともあったが完治はしておらず、毎日何種類もの薬を服用している。特にここ数年は、仕事のために日付が変わるころに帰宅することも多い。日ごろの多くの家事を同じく教師である父が行い、母は休日返上で会議や出張に行く。そうすると糸が切れたように体調を崩す。気持ちに体がうまく追いつかなかったり、一日中何もできなくなったりすることもある。仕事を辞めてもおかしくはない状況だ。それでも母は、力強く、自信を持った様子でこう言った。

「でもね、私は私として生きていくんよって思ったのが、鬱病になってからやった」。母は、うんうん、と何度も言葉を噛み締めるようにうなずいた。

鬱病になってから、母の心境は大きく変わったという。母は教師であることもあり、人権や性差別などの問題については敏感な方であった。でもね、と一度言葉が止まる。「やっぱり心のどっかで、結婚したら旦那さんに尽くす、子どもができたら子ども中心の生活になる、教師になったらいわゆる教師っぽくなるっち思っちょったんよ」。

しかし実際はそうではなかった。教師として働くときは、自分の信念を曲げることは嫌だと言いたかった。母として子どものことを考えるときは、心の隅で少しだけ世間一般の良い母親像がちらついた。そうする内に、心と体の不調のサインに気づくことができなくなった。そして休職を選択するほど精神的に追い込まれ、鬱病と診断された。

> あれ、っち思った。私はこんなにいろんなものに捉われちょったんやな。私のことを批判する人が、私の子どもたちにご飯作ってくれる？洗濯してくれる？批判する人たちは私に何かをしてくれるわけじゃないんよ。それで気づいた、結婚しても、子どもができても、先生になっても、私は私。信じたものと違うものにはならんのよ。

私がゆっくり頷くとそれまで少し顔をしかめていた母の表情が和らいだ。私を見守るように、少し画面に前のめりになって微笑みながらこちらを見つめていた。「やけんね、何があっても私は私。私っちいう軸に、大切なものが増えていっただけ。パパ、子ども、仕事、みたいにね。それがその時の状況でちょっと仕事に寄ったり、子供に寄ったりするんよ」。

まるで大きな木の幹を連想させるように、母がジェスチャーをした。その幹がその時々で、大切にしたいものに重心をかける様子を手で表現した。

> あんたたちのこと犠牲にしたこともあった、それは悪かったち思う。でも特にあんたには、世間一般のいわゆるいい母親、いい妻の像に捉われんで生きてほしい、自分の信じることをやってほしい、そう思うんよ。

子どもである私たちとの時間を犠牲にしたあげく仕事のし過ぎで鬱病になった母は、母と教師という二足のわらじの両立をどう思っているのだろうと、私は娘の立場から疑問に思っていた。しかし、“両立”ということはもう考えていなかった。そこにあるのは、何があっても“私”として生きていく、という一人の女性としての信念でありそれは娘の私に確実に届いていた。

時刻は23時近くなっていた。20時から始まったインタビューはすでに2時間半以上も経っている。もう2万字分くらいしゃべった、と苦笑して画面を閉じた。私は、自

分との時間を犠牲にされてきた、大切にされなかった、と考えることが時々あった。こんな母親になりたくない、と思った時もあった。しかし、悲観的になりすぎていたと思い直す。私の想像をはるかに超えたところで、仕事、私たち家族、そして自分の信念を大切にする母を前に、私は少し悔しいような、うれしいような気持ちだった。

才能は努力から

菅原　美穂

6月某日。朝食を終えると、「失礼します」と上司の部屋に入る所作を真似るようにして、妹のRが私の部屋に入ってきた。おふざけが大好きなRは、ユーモア溢れる言動でいつも我が家を笑いで包んでくれる存在だ。いつも通りにも見えたが、今日はインタビューされると分かっているからか、少し緊張した様子でいるのがわかった。インタビューの場所を選んだのはRだった。私たちは普段お互いの部屋には入らないため、物珍しそうに部屋の中を徘徊していた。少しして部屋の真ん中にあるテーブル越しに私たちは座り、「学校の宿題は忙しいの？」と他愛もないことから話し始めた。

Rは現在、神奈川県のいわゆる進学校に通う高校2年生だ。弓道部に所属し、部活動と勉強の両立を目標に毎日忙しそうに過ごしている。自分のことについて多くを語らないRだが、その日の学校での出来事や友達の話を嬉しそうに話す姿から高校生活が楽しいことが伝わってくる。

そんなRは中学生の時はソフトテニス部に所属していた。1年生の秋頃、足に痛みを感じて病院で検査を受けた。しかし原因や病名はわからず、安静にするようにと言われ部活動を休んだ。すぐ治ると思っていたのに痛みが引いて治るどころか、その痛みは増していった。痛みと不安を抱えながら病院での検査を繰り返し、ようやく病名がわかった頃には約半年が過ぎていた。紹介された病院で診断された病名は「フライバーグ病」。足の指の骨が欠けて壊死していたのだった。これ以上に痛みを感じるようになれば手術をするしかないと言われ、その手術は長期間を要すると説明を受けた。まずは「走らない、ジャンプしない」ように日常生活を送り、現状維持を目指すことになった。Rは部活動どころか体育の授業にも参加できなくなった。この約半年の間、Rは無気力だったように見えた。

> 部活に関してはもういいやって気持ちが強くなってたんだよね。休みすぎたっていうのもあるけどでも、（中略）みんなの態度がちょっと、何て言ったらいいんだろう、やっぱりやってないからやってる人の辛さとか大変さとかわからない中で明るく話しかけてたら陰で悪口言われてた。運動自体もそんなに得意じゃなかったからアドバイスされてもうざいんだけどってなって、ここ居場所ないなっ

てなって。だったらもういいかなって。

少しだけRの目が潤んだように見えた。Rの口からこの話を聞いたのは初めてだった。Rはそれを隠すように話を続けた。

部活はもういいやってなって、体育の授業できないってわかって最初に思ったのは成績ヤバ！ってことで。部活がなくてすることないし勉強に切り替えようかなって。

この頃から、定期テストに向けた勉強をするようになった。親や姉に「高校受験は成績が大事だ」と言われ続け、それを受け止めていた。「勉強しなさい」と言われるから勉強することにしたのだった。まさに言われるから始めたのだった。そんなRが最初に手を付けたのは理科の勉強だったという。「なんで理科だったの？」「うーん。理科の先生が好きだったからかな（笑）。でも自ら勉強したって言うよりは勉強せざるをえない状況の中で理科を選んだって感じかな」。

やらなければならない状況で勉強を始めた次の定期テストにおいてRは理科で学年1位をとった。その瞬間、クラスの子のRを見る目が変わった。「あぁ、あいつできるんだ」、そんな視線が初めてで嬉しかった。クラスの子から理科の質問を受けるようになり、さらには定期テストの順位を競う新たな友達もできた。先生にも褒められた。それまであまり自分に自信を持てなかったRは、少し自信を持つことができた。

自分の中で自信って才能からくるものだと思ってたから、才能って言えば例えば絶対音感とか。逆に努力から自信って来るものじゃないって思ってて。今は違うけど。そう思ってたから例えばRは運動神経そんなに良くないから、部活とかも努力してうまくなってもそれは才能じゃないから、どれだけうまくなっても自信はつかないんだろうなって言う感じはしてた。

何においても自信は才能からくると感じていたRの考えは、自分の努力でつかんだ学年1位をきっかけに少しずつ変わっていった。目標を立てて勉強するようになり、気づけば模試の偏差値は70を超えていた。

しかし残念ながら、第一志望であった高校には合格することができなかった。Rは「人生で一番落ち込んだ」と言っていた。それでもRにとって高校受験は楽しいものであった。今では大学受験について考え始め、受験に対する不安を抱えながらも「学びたいことが学べる大学に行きたい」と目を輝かせて話す。

Rにとって勉強は「目指すこと」を教えてくれた。たとえ結果が伴わなくても「目指すこと」だけは忘れてはならないと強く感じさせられた。部活動と勉強の両立を楽

しんでいるRの今がかけがえのないものになりますように。

人脈は宝

諏訪　薫

インタビューは、自宅の居間で行われた。平日の夜から、こんな風に父親と顔を突き合わせて話す機会など殆ど無いので新鮮である。仕事を終えた父親は幾分くたびれていたが、いざ始まると何の事は無い。家ではあまり見ることのない「仕事人」の顔で自身のことを語ってくれた。長年人前で話す仕事をしているからか、打てば響くように回答が返ってくる。こちらもオタオタしていられないので、慌ててメモを取りだした。父は現在、公益財団法人で学童保育と児童館の責任者として働いている。様々な経歴を経て、現在勤続32年目の団体職員だ。

なぜ、国際貢献やボランティアの道に進んだのか。

> やっぱりボランティアリーダーをやって、（中略）1985年に栃木県のお金でフィリピンに行かせられて、行かせてもらって、どういうところならボランティアの活動ができるのかと思って、調べたらこういうところがあって、まあ入職試験を受けた。（中略）で同時に証券会社も目指していたけど、（中略）ボランティアでフィリピンに行く研修とかぶってやめました。

ここで疑問が浮かんだ。以前から国際協力に強い関心を寄せているのに、現在はなぜ日本に拠点を置いているのか。そう投げかけると、「まあ、日本にいてもできる国際協力があんじゃねえか」、と即座に答えが返ってきた。

> 今の仕事は色んな国の人も来ます。親が中国人だとか、だからやっぱそういうところの問題点はすごく感じてるよね。以前働いていた高齢者施設でも、どこでもいる。彼らとどう関わっていけば良いか考えて、行動するだけでも国際的な支援や活動は出来る。若い頃もそうだし、仕事でも色々海外に行って、マイノリティーとしての扱いを受けたことが原動力になってる。

これまでの仕事における人間関係はどうだったのか。そう聞くと「良かったり悪かったり、まあいろんな人がいた。嫌いでも仕事はやらなきゃいけないし、でも仕事なのにやらないやつもいる。そう言う奴は最後に出て行くけどね」と言う。ただ、繰り返し口にしていたこともある。それは仕事が、これまで出会った人々との繋がりで成り立っているということだ。例えばこんな話がある。父が以前勤めていた施設は、

現在の勤め先と近い場所にあるのだが、今も時々その施設の利用者に会うという。「会うと決まって、やれ将棋だ踊りの催しだ、いろんなことを手伝ってくれと頼まれる。それが今の職場、児童館の子どもたちと一緒にやろう、ともなる。仕事はたくさんの人と繋がっているね」。仕事もさることながら、趣味の酒蔵巡りでもその伝手を活かし、美味しいお酒を嗜む。沢山の人々に囲まれて、父はこの仕事を本当に楽しんでいるのだと感じた。

最近の仕事で難航したり、納得できなかったりしたことはあったのか。そう尋ねると、児童館にある金髪の男の子がやってきたというエピソードをあげてくれた。「実はその子、少年院を出たばかりだったんだけど、根はとても優しい子。児童館ではみんな話を聞いてくれるし叱ってくれる。だから彼はここにやってくる。そういうことを役所の人間は知らない。（中略）知らないし、こっちに一任するような指示しか来ないこともしょっちゅうある。もっと詳しい指示をしてくれないと困る」。普段から耳にしていたが、役所と現場との対応のズレ、その改善に向け父も日々現場の声を伝え続けている。

最後に、どうしても伝えたい出来事があったというので追加のインタビューを敢行した。それまでとは異なり、緊張した面持ちで話し始める。忘れたくても忘れられない光景。それは、丁度四年ほど前に、キャンプ中だった一人の子どもを亡くしたことだという。

> 突然倒れた子がいて、AEDとか、色々やったけど助からなくて、ドクターヘリで運ばれてった。それ以来子ども相手のキャンプが怖くなって、一旦担当から外してもらった。子供の笑顔は好きだし、成長していくのを見るのは楽しいけど、その時は助けられなかった。（中略）改めて、人の命を預かってる仕事だって、責任があるって感じた。命は大切にって軽い言葉では語れないよ。

だが、そこで改めて強調する。「だからこそ、支えてくれる人たちとの関係はとても大事。今まで出会った人たちは自分にとっては宝で、財産だと思う」。私は父がこの仕事に生涯関わり続けるだろうと、そう何となく、しかし強く感じた。

父はそもそも、異動の度に児童館・福祉施設・ホテル学校の職員などと職種が変化する不思議な仕事に就いている。大切な子どもを失って辛い思いをした過去や、思い通りにいかない仕事の悩みも数多くある。しかし人脈を大事にし、過去の出会いを次の仕事や、次の出会いにつなげていくという非常に人間味があり、稀有な仕事ではないだろうか。何より、父が仕事を楽しんでやっていることが伝わる。どんな時も人が人を繋ぎ、支え、助け合いながら生きてゆくのだと実感した。

ひらめきクイズは経験値？

千葉　菜々緒

「クイズと言ってもなぁ…僕あんまりクイズの人ではないからなぁ」。

6月29日午後3時頃、Sの部屋を訪れた。Sは昔からテレビ番組やパズルなどが好きで、サークルもクイズに関連したところを掛け持ちしている。ということで、この日もクイズについての話を聞くつもりでいたのだが、そう伝えたところこのような反応が返ってきた。どういうことだろうか。

話を聞いていくと、彼が所属するサークル内で「クイズ」と言った時に指し示すのは多くの場合、クイズの中でも「競技クイズ」であり、パズルや謎解きなどとは分類が違うらしい。そして、彼は競技クイズを好まないという。

「単純な暗記が好きではないというか。…クイズに強くなるプロセスが苦手」。

そう言うと、彼は本棚からパンフレットのようなものをとり出した。それは競技クイズの大会が終わったあとに発行される問題集だった。これを覚えて勉強していくのだが、彼はその暗記のプロセスが得意ではないという。

「いろいろ知ってるに越したことはないんだけど、こういう、クイズ、みたいなのをやるにあたって、知ってるっていうことは僕は一番には置いてない」。

彼が重視するのはひらめき、思考力だ。

「ものをただ知ってるっていうよりは、情報が欠けまくった問題文を見て、間がどうなってるかとかさ」。

Sは自分が作った問題を見せてくれた。含まれるひらがなとカタカナを落とした問題文から元の文を推測し、さらにその問いに答えるという、少し変わったルールを持つ問題である。

『野球一人打者、、、一試合全打何？』

字面から野球の問題だということがわかる。後半へと3つつながった句読点が特徴的な問題文だ。句読点の間にはひらがなかカタカナしか入っていないということは、「野球で一人の打者が（カタカナの名詞）するのは、（カタカナの名詞）、（カタカナの名詞）、（カタカナの名詞）、…は何という？」というような文構造だろうか。この問題は、元の問題文を推測するという工程が入り込むことによって、普通の競技クイズよりも一段階複雑になっているということが分かった。ルールの特性を考えあわせて想像していくことは、確かに普通の知識問題とは違った発想を必要とする。「俺はこういうのが好きなの」、Sは言った。

Sの考えでは、競技クイズは知識量が勝敗において大きな比重を占めるが、「謎」は指定された環境を用意すれば、誰にでも解ける可能性がある。しかし彼は一方で、謎やひらめき問題をより良く解くには「完全に経験」ともいう。謎は知識を問わず、誰にでも解ける点が特色だったのではないか。これは、一回解いたら同じ問題を何度も

楽しむことはできない一方で、似たような謎は数多くあり、それらを解くときに経験が重要だと言うのだ。

今度見せてくれたのは、とあるイベントで配布された紙だった。用意されたひらめき系の問題を参加者がそれぞれ解き、謎解きの能力がどのくらいあるか測ることができるという企画だったという。5つに分けられた能力のうちの一つに「ひらめき力」という項目がある。これによるとひらめき力とは、「過去の経験・記憶から直感的に答えを引っ張り出してくる力」。「なかなか書くなぁという感じのことを書いているね」。彼によると、テレビで放送されているひらめき問題の中には、ある程度似たような問題を解いている人なら、ほぼ考えることなく解けるものもあるらしい。「見えちゃう」と彼は表現した。「横に並んだ4文字が、外側の2文字と内側の2文字に分かれて見えたりとか。縦に並んだカタカナがちっちゃくなって漢字にみえたりとか。見えるようになんの、まじで」「多分小学生ぐらいの時から、お茶って字があるじゃん、あれがカタカナの『サ＋ヘ＋ホ』に見えてたよ。いつ気づいたかはわからないけど、気づいたときからあれはカタカナにしか見えないもん。俺は」。ではただ経験を積めばよいのか。Sはあっけらかんと、それを「悲しいね」と言った。「ああいうのって思いついた瞬間が最高に楽しいのに、経験を積むほどその楽しさが失われていくわけだから」。

私は今まで、ひらめき系の問題は競技クイズのような専門性がなく、ある程度素人でも解けそう、ハードルが低そう、というイメージを持っていた。そのため、今回聞いた話はその想像を超えていた。彼にとって謎解きの魅力は解を思いついた瞬間の喜びであり、それは勝ち抜いたり人と比べて多く正解することよりも、あくまでも謎自体を解くことにある。彼は「経験を積むということは難しい」、「悲しい」というが、それは問題を解くという根本的な楽しさへの自覚の高さとも捉えられる。

ちなみに文中の問題の答えは「サイクルヒット」（元の問題文は「野球において一人の打者がヒット、ツーベースヒット、スリーベースヒット、ホームランを一試合で全て打つことを何という？」ということになる）。皆さんは問題を解くことができただろうか。

受け入れてくれる場所（まち）

東　菜々花

6月下旬の日曜日、夕食を終えた20時過ぎ。ただの談笑にならないように、場所は父が普段滅多に入ることのない私の自室を選んだ。私の父は今年46歳になる。機械関係の仕事をしており、地元北海道で25年間働いたのち、約3年前に転勤で東京に行くことになった。私が上京したのを機に、現在は一緒に暮らしている。だが、父は夜勤

のため、起きている父と顔を合わせるのはほとんど土日だけである。

仕事の話を聞かせてほしいとお願いしたところ、快く承諾してくれた。インタビューでは、東京での仕事や生活について聞かせてもらった。しかし、父はどこかとってつけたような話し方であり、明らかに格好つけていた。またその際、東京での仕事を「自由」だと繰り返し話していたのが印象的だった。父の本音と自由について知るべく2回目のインタビューをお願いした。帰ってきた言葉は「いいけど、土日は（北海道に：筆者補足）帰るよ？」というものだった。よって、2回目のインタビューはZoom（ビデオチャットアプリ）を用いて行った。時刻は家族が最もリビングに集まる21時。妹がテレビを見て笑っている声が画面から聞こえてくる。

「自由…え、具体的に言うの？そうだなあ、札幌のときは会社に出社しないとき、現場に直行・直帰するときは、直行したときに『どこどこの何々に何々のために直行します』っていうメール、もしくは電話をします。直帰のときも同じ。（中略）それが習慣で、全員がやってた。連絡がないってことは、なにか異常が起きたんじゃないかなってみんなが思う」。父は反応をうかがうように一息つき、また話し始めた。

「東京は、全くなし。それもある意味自由だけど、責任もある…」、ここで、画面が固まった。「あ、止まった。待って！」という声も届かず、父は話し続けている。少しして、画面が動き始めた。

「止まった？（体を揺らしながら：筆者補足）俺は動いてるよ」と父はなぜか誇らしげだ。「うん…それで？」「東京は、サボって（会社に：筆者補足）行かなくても、ちゃんと行ってる人も連絡ないからわからない。帰った（直帰した：筆者補足）ときも、どっかで飲んだくれて（家に:筆者補足）帰ってないのか…ちゃんとまじめに帰って、洗濯物たたんで、娘のごはん作ってる人も扱いは同じ」。

口を挟まないようにしていたが、さすがに黙っていられなかった。「ハハハ、いや、ごはんは作ってる？」「いや、作れるとき作るよ」と父は言うが、ほぼ作ってもらった覚えはない。私に反論の余地を与えず、話は続く。「そう、なんだけど、それくらい…自由」。パソコンに向かって話すことに慣れてきたのか、父は落ち着いた様子で話し始めた。

東京では、上司が受け持つ部下の数が北海道のおよそ3倍から5倍いる。よって、たとえ一人につき数分だとしても、連絡をとるだけで膨大な時間を使うことになる。したがって、それはやめようといった風習がある。その話を聞いて、以前父が「東京の人は別に冷たくない」と言っていたことを思い出した。東京の人は、他人に無関心であるのではなく、関心を持っている暇がないという。そのような東京の環境は、「必要以上に干渉されることがなく、仕事に集中できる」と父は語っていた。

次に、仕事が早く終わったとき、会社に戻るかどうかという話題に移った。「北海道はなんで（会社に：筆者補足）帰ってこないの？みたいな雰囲気。例えば、エリアが札幌市内だと、会社帰ったってせいぜい40分以内で帰れるだろう。ただ、東京の人

たちは会社まで行って家帰ったら、下手したら2時間半とかかかる人もいる。現実的に、非効率的」。

北海道では仕事が早く終わった場合、当たり前のように会社に戻る。同僚たちと顔を合わせ、近況報告をし、事務処理を行う。しかし、余計なことまで話しているうちに定時になってしまう、なんていうこともよくあったという。

「だけど、東京来てから同じ（早い）時間に終わった場合は、『会社帰るより、（電車が：筆者補足）混んでない時間に家に帰って体休めて、明日1時間早く行ってやってやるぞ』ってなる。これは就業規則的にはアレだけど、そういう『勝手にフレックス』を俺はやってる。もっと言うと、家でやるな。これは、『勝手にテレワーク』。そういう環境は与えられているね。それが、すごく、自由かなって」。そう言って、父は自分の言葉に満足するように何度も頷いた。

「今は居場所があるからね。北海道のときはみんなそれが会社だったけど、今は違う」。インタビューの終盤、父はそう言った。それは時に涼しいカフェであったり、現場だったり、家だったり、ごくまれに会社であったりする。東京で感じる自由の秘訣は、多様な居場所の選択肢にあるのかもしれない。インタビューのお礼を伝えようと思ったら、画面はすでに話の終わりを嗅ぎつけた妹と母に占拠されていた。「パパすぐ（ソファで：筆者補足）寝るから、早く風呂行ってきて！」と妹が叫ぶ。残念ながら、父の居場所は実家のリビングにはないらしい。

“普通”の幸せ

森　朱香

> 人生設計といえば、就活を始める頃の大学3回生の12月でぼんやりと意識し始めた。25歳くらいで結婚、30でマイホーム。（中略）27、28で第一子、30～30過ぎで第二子、子どもは2人がいい、70～75で死亡（笑）。

29歳になったばかりの兄は、現在四国で妻、娘と3人暮らしをしている。食事や入浴を終えた就寝前、実家にてNetflixを視聴する母の隣でiPhone8を片手にインタビューを受ける。

「仕事しないと家庭は持てないし、プータローじゃあ結婚できんけぇ、安定した生活がベスト、安定した生活は平均収入（約500万円：筆者補足）くらいで、たまにある贅沢がちょうどいい。」

彼の人生設計の中で家庭の存在は大きく、家庭を築くとは子どもを持つことと同義である。高校生の時は25歳で結婚をと考えていたが、男性は飲み会などでお金がかかり社会人3年目は経済的に余裕がなかった。それでも仲のいい高校時代の友達の一人

が25歳で周りに先駆けて結婚した。当時は早い、羨ましい、生活等大丈夫かという心配はあった。それ以降、友人の結婚ラッシュを迎え結婚を意識し始める。27歳くらいがちょうどよく、自身も適齢期に結婚したと振り返る。実際にやってみたらできる、と今では思う。

「家庭に子どもがいないのは自分の人生では考えられない。子どもは2人でいいけど女の子2人だと考える、野球やらせられないから。かといって今男の子生まれたところで娘を可愛がって男の子を放っておきそう。勝手に育つから（笑）」。どうして子どもが欲しいのか問うと、具体的かつ論理的説明ではなく「かわいい」と連呼した。9歳で妹が誕生してから、純粋でかわいらしく、見ると癒やされる子どもを好きになったのだという。

人生設計から逸れた、または想像と異なっていたことを話す時、彼は目を閉じて考え込み、パチパチ指を鳴らしながら、それまでよりも時間をかけ、考えを言葉にしてゆく。「子どもできるまでは共働きの予定やった」。転勤により彼は岡山、妻は広島から四国へ引っ越したため、妻は離職した。その後妊娠したため新しい仕事も始めなかった。真剣な顔になって核心をつくようなことを言った。

> あんまりこれやりたい、これ食べたいとかない。自分のやりたいことは特にない。これまでの人生、これからの人生にも。誰かが楽しいと思えることを一緒にできたらそれでいい。子どもが大きくなったら、子どものやりたいことはさせてあげたい。（中略）奥さんのやりたいことを優先させたい。

就きたい仕事、進学したい大学、勤めたい会社を決めて行動する人は結構いると考える一方、彼は学力に適した大学を選び入学し苦労することなく卒業した。

> おれはじゃけぇ、なんじゃろうなぁ、個人的に思うのは大学卒業→就職→結婚→家庭までが一般的な人生って考えてたけどそれは大した人生設計じゃない。人生設計思い通りにいかないことの方が多いんじゃない？

就職はともかく、受験においては自分の第一志望の学校ではなく、予定の＋αの学校に行けたらいいなとは思うものの、それも自分の強い希望ではないため成功していたかは分からない。だが、勉強、野球等がそれなりにできてきたため、環境に適応する自信は持っている。野球は小学2年から始め、中学時代はクラブチームに所属し、高校時代には甲子園を目指し練習に打ち込んだ。野球について調べ、それらを実践して成長すると達成感を抱いた。また、時にストレスを発散させ、今でも親交のある親友をもたらし人生を充実させるという大きな役割を果たした。

会話中に多用されたのは、“普通”･“平均” という、大半の人や過半数を意味しつつ、

様々な経験を通して限界に直面し、現実を見るうちに形成された主観的なものを意味する言葉だった。彼は人柄の良さや清潔感のある見た目等により友人や親・親戚など周囲から信頼され、仕事も家庭も理想的な生活を送っているのではないか、という私の印象に反し、彼の文脈での“普通”・“平均”という表現から彼自身にさほど期待していないと覗えた。私は彼に対して人生における最大限の成功を追及してほしいと期待すべきでないかもしれないし、そもそも世の中の人々が自己実現すべく行動に移しているわけではないのかもしれない。

私は彼に親しみを持ち尊敬している。にもかかわらず、今回のインタビューにより、既存の習わしとされうる年の重ね方に逆らうことなく周囲の見えない期待を不審がらず従順に生きることにより、他者に迷惑をかけずに生きるだけでなく、他者に好かれる人物が出来上がったのか、と否定的な見解を抱く私自身のアンビバレントさに気付かされた。

気が付くと日付は変わり、部屋には二人だけになっていた。自分自身は「幸せだからそれでいいし、（私が:筆者補足）“普通”の考え方に違和感を抱くならそれでいい」、というインタビューの締めの一言と、話題がインタビューから個人的な相談に移行しても親身に聞いてくれる優しさに、やっぱり好きだと思った。

Ⅱ　友人にきく

「一生楽しい、面白いを大事にしたい」

青木　克磨

その日、Mは平日にも関わらず朝からどこかに出かけていた。そこで私は彼の帰りに合わせて待ち合わせる事にした。

Mは私と同じ大学に通う友人だ。しかし今年度は大学を休学し、ある企業のインターンシップに参加している。この日の用事もそれが理由だった。最初に休学すると聞いた時、私は驚くと同時に納得もした。大学は4年での卒業が普通だと考える私にとって休学は選択肢ですらなく、積極的に休学を選ぶ事自体に驚いた。一方で、Mは他の人が手を出せない事を平気でやろうとする人間だと思っていたのでどこか納得もしていた。そしてその背景に興味を持ちインタビューさせて貰う事にした。

駅前で待ち合わせたMと私は夕食を取り、ファストフード店でインタビューを始めた。既に19時を過ぎていた。

始めに「なぜ休学しようと思ったのか」と尋ねると、Mは真面目な口調で答えた。

このままいくと何かあんまり楽しい事にならんだろうなって思ったの。ていうの

は、俺はめっちゃ凡人だって言うの、自分の事を。よく言うでしょ？それは何でかって言うと、周り見ててこいつは何かあっても上手い事いくだろうなっていう奴いるじゃん。…そういうのって俺の中に探してもないの。俺って別に仕事ができる人間じゃないじゃん。…そういうのを考えてる時に何だって思ったの。自分が勝負できるのって何だって思ったの。そうなった時に俺は精神的に強い訳じゃないから、このまま行くと多分すごい苦労するだろうなって思った。

確かに彼はよく自分は凡人だと言う。しかしそれは彼が人より劣るという事ではない。人並みには色々な事をこなせるし就職もできると思う。何とかはなる。けれどそれではきっと苦しい思いをする。だから将来に漠然とした不安があるのだと続けた。

話を聞く中で彼が誰にも負けない「強み」を欲している事が分かってきた。そしてそれは今のままでは手に入らないという。休学や長期インター―ンのような、「他の学生が行かない道に行かないと自分の強みって得られないだろうなっていうのがある」。この「強み」への欲求が休学を考え始めたきっかけだった。大学で学んでいる事は仕事にはしないし、強みになるほど打ち込める訳でもない。だから自分だけの強みにできそうな何かを探すために休学を考え始めたのだとMは語った。

更に彼は大学でやりたい事を探していたとも言った。やりたい事を仕事にしたい。強みも仕事に活かしたい。そうした話からはMの言う強みを探す事とやりたい事を探す事は殆ど同じ事のように思えた。

休学のもう1つの理由は、そのやりたい事が見つかった事だった。IT関係について学びたいと思ったが自力は学ぶのに限界を感じ、長期インターンシップへの参加を決めた。しかし大学との両立は困難だと考え、休学を決めたのだった。元々休学を考えていたMにとっては都合が良かったのかもしれない。

インタビューの中でMは、休学を選んだ背景には「環境があった」と繰り返した。環境とは彼が所属するある団体の事だ。その団体はMの高校の同級生である代表が地元で地域おこしをしたいと作ったもので、小規模のイベントを企画・運営しているという。メンバー7名が活動の上で重視するのは「何をやりたいか」、「いかに実現するか」だという。誰かが「〇〇をやりたい」と意見を出せば、皆でそれを実現する。「ピザを作りたい」という意見からピザ窯を造り、「動画投稿をやりたい」という意見からゲーム実況を行う。そんな環境にいたからこそ型に嵌らない思考ができるようになったのだという。「高校であいつ（代表：筆者補足）に会ってなかったら大分違ったと思う」。そう語るほどMにとって団体の影響は大きかったようだ。

結局休学を通してどうなりたいのか、と尋ねた私にMは答えた。「超漠然としてるけど強くなりたいよね」。彼の究極目標は楽しくやる事だという。そのために「強くなりたい」。しかし強いという事が何を意味するのかは彼自身もはっきりしていないようだった。人に対して「強い人」だと思う事があり、彼らは自分のやりたいように

自由にやっている人だった。自分もそういう風になりたい。そしてどうしたら良いか考えた結果、環境を変えれば何か変われるかもしれないと思い、環境を変えるために休学を決めたのだった。

インタビュー前、私はMを他人とは違う考え方をする人間だと思っていた。だから休学にも私には理解し難い理由があるのだろうと思っていた。しかし実際はMも私と同じように将来への不安を感じ、それをどうにかしようと行動していたのだった。行動の起こし方が他とは違ったが、それもMの中では十分にあり得る選択肢だったのだと思う。少なくとも今できる事は何かを考えての行動だという点では、それほど特殊ではないのではないだろうか。特殊な人間のように見えて実際はそれほど違わないMの側面を見られたように思う。

アイドルオタクを突き動かすもの

岩田　日向子

今回私はアイドルオタクの心理を探るべく、7年来の友人の家を訪れた。彼女とは中学生からの付き合いで、私は彼女のアイドルに対する情熱をすぐ側で見守ってきた。アイドルにかける思いを存分に語れるということで、彼女はかなり乗り気でインタビューに応じてくれた。

彼女が初めて好きになったアイドルは、SixTONESのメンバーとして活躍するJだ。中学3年生の時にたまたま深夜にジャニーズJr.の番組を見て、当時の好きな男子と同じ名前だった、という単純な理由で彼に惹かれた。高校生になった彼女は、バイト代を資金に、ライブツアーがあれば地方まで行くほどの立派なジャニオタになっていた。

しかし、SixTONESも段々と人気が出てデビューも決まり、彼らが活動を始めた頃から応援している立場からすると嬉しい反面、遠い存在になっていくような感覚があった。そんな時に、YouTubeで地下アイドルという存在に出会った。

「初めてライブ動画を見たときに、近い！羨ましい！って思って。Twitter見てたらリプ（※1）もくるし、チェキ（※2）も撮れるし覚えてもらえるし、ジャニーズじゃ考えられないじゃん」

彼女の担当（※3）であった地下アイドルNに初めて会った時、Nはまだアイドルになって3ヶ月程度でファンもほとんどいないような頃だった。もちろんパフォーマンスの完成度という点はジャニーズに劣るものの彼女は頻繁にライブハウスに通うようになった。やはりジャニーズと地下アイドルに求めるものは違うのだろうか。

もちろんJくんが歌とかダンスをちゃんとやってなかったら文句言うよ、ジュニ

ア同士での競争もあったし、手を抜いて欲しくない。SixTONES（が好きなの：筆者補足）はやっぱりパフォーマンスと6年越しの情かな。デビューに向けて頑張ってる姿が好きだからファンサ（※4）もらえなくてもお金払って後悔したとかは思わない。でもNくんには歌もダンスも求めてないかな。もちろん高校の文化祭？みたいに思うことはあったけど、頑張ってるのかわいいーっていう感じ。（中略）Nくんへの好きは本命の好きに近いと思う。今は頭おかしかったなって思うけどね（笑）、あとは優越感だね。私が2人目のファンで、後から来たオタクに比べたら仲良いし大切にしてくれてたし、他の人に負けたくないみたいなところはあったかな。

しかし、毎日のようにライブに通う中でオタクをやめたいと考え始めるようになった。チェキを何十回も撮るために必死に働き、Nに会うために毎日新宿や渋谷まで通う生活は精神的にも体力的にもストレスだった。そんな時に彼女がインスタグラムを見ていると、友だちが投稿した集合写真にNが写っているのを見つけてしまった。お金を払って会いに行っていることに対する虚しさや自分が苦手な集団Nがいたことなどが合わさって、一気に熱が冷めた。これに加えコロナ騒ぎでライブも全くなくなり「ちょうどいいしこれを機に地下のオタクやめようかなー」と冗談か本心かわかりづらい笑顔で言っていった。

インタビューが30分を過ぎたころ、「なんでアイドルが好きなんだと思う？」という素朴な疑問を投げかけると少し考える素振りを見せながらこのように答えてくれた。

アイドルってお金払えば絶対に見返りくるじゃん。相手から嫌な顔されることないじゃん、仕事だから。払ったら払った分返ってくるし、保証されてる安心感かなあ。（中略）あとはアイドル好きな人ってオタクしてる自分が好きみたいなところもあると思う。地下アイドル界隈はみんな水商売みたいなことしててもそれに対してすごい大っぴらだし、アイドルに対してここまでできちゃう私！みたいな、それで他のオタクにマウント取ったり。多分自己肯定感は低いけど承認欲求は強い子が多いと思う。そういう人たちが私にとって新しい人種で刺激的だった。びっくりしたのはオタク同士で褒め合うの、今日もかわいいねとか、髪色超いいねとか、絶対お互いを否定しない。多分自分も褒められたいからだけど。だからそこにいることは居心地良かったし楽しかった。

彼女自身、世間一般ではアイドルオタクは現実では恋愛ができないイタイ人と思われがちだということは十分に理解している。しかし彼女は今でもSixTONESを応援しているし、最近では別のジャニーズJr.に熱を入れており、アイドルに対する情熱は留

まるところを知らない。これほど客観的に自己分析ができる彼女を魅了し続けるアイドルという存在を、単なる好意の対象として済ませるのは不十分だ。彼らのパフォーマンス、ストーリー性だけでなく、アイドルを介して得られる人間関係や他者からの評価、安心感など、アイドルがいかに人を夢中にさせる要素で溢れているか、彼女の話を聞いて気づくことができた気がした。

＜注＞

（※1）リプ：Twitter での返信のこと

（※2）チェキ：アイドルと一緒に撮る写真のこと、相場は1枚1000円くらい

（※3）担当：自分が応援しているアイドルのこと

（※4）ファンサ：ファンサービスの略

コミュニケーションとしてのスマブラ

斉藤　恭平

彼は、大学の人形劇サークルの二個上の先輩であり、良き友人であった。大学一年生でサークルに入ったころからスマブラ（1999年から続く任天堂の対戦アクションゲーム「大乱闘スマッシュブラザーズ」シリーズの総称）にはまり、寝食を忘れるほどのめり込んだ。四年次には朝の4、5時までスマブラをして、昼の一時に起きるという生活リズムを送るほどであった。授業が終わったら部室で終電まで友達とスマブラをすることもあったそうだ。そんな彼は、今までにこれほどゲームにはまったという経験がなかったという。彼はスマブラが好きすぎて、授業を休むこともあり、単位をとるのさえぎりぎりであった。それでも何とか卒業し、就職をしていった。そんな彼が今スマブラをどのように捉えているのか気になるとともに、こういうインタビューの場なら普段聞けないことも聞けると思い、お願いをした。

そして、私たちは彼の家の近くの駅前のカフェで待ち合わせをした。外は猛暑日のような暑さでカフェは少し混んでいた。そして、彼は少し遅れてやってきた。久しぶりの再会ということもあり話が盛り上がってしまい、カフェの中では二人が異様に浮いた存在であることを自覚した。少し落ち着いたところで私はおもむろに話を始めた。

「最近どう？」そんな他愛のない会話から始めていった。彼は「仕事が忙しいね」と笑って答えていた。ついこの間まで大学生であった彼が急にどこか遠い存在に感じられた。そんな彼は大学時代にはスマブラの大会やオフ会にも積極的に出ていたそうだ。「強かったから楽しいし、勝てると楽しい（笑）」と当時のことを語っていた。「そもそもなんでそんなにスマブラにはまったの？」彼はそんなこと考えたこともなったようで、少し戸惑っていた。カフェで流れるおしゃれなBGMが聞こえてくる。「人と

やるゲームだからかな。今までのゲームはたいてい1、2か月で飽きていたんだけどスマブラは対人戦でもあるし、読みあいの部分が大きいから相手の癖を読んでプレイするのが楽しいんだ。」とうまくまとめてくれた。

そんなスマブラを楽しんできた彼にスマブラを辞めたい時があったのか聞くと、「んー、辞めようと思ったときはないかな…」と少し間をおいて答えた。「後から始めた友達が自分より明確に上に行かれた時は悔しかったけど、それでもスマブラ自体が楽しいことに変わりはなかったかな」と話す彼からは、異常なスマブラ愛が感じられた。しかし、社会人になると日常生活の大半が仕事になってしまい、以前よりゲームができなくなったと言う。だんだんと勝てなくなると辛くなるし、朝が早く仕事に遅刻できないというプレッシャーも増えた。社会人でも競技者として続けている人もいるが、彼は、「きちんとやろうとは思わなくなった」と語る。「やろうと思えばできるけど、そこまでかけられなくなった。」彼は以前のように競技者として多くの時間をスマブラに割くことはできなくなった。しかし、彼は、依然として趣味としてのスマブラを楽しんでいる。

「勝つためにやってるんじゃなくてコミュニケーションのツールとしてスマブラを楽しんでいる」。

私は、てっきり勝つためにスマブラしているのかと思っていた。もちろん勝ちたいという側面もあるだろうが、それよりも彼の考えの根本には「コミュニケーションのツール」としてのスマブラが大前提にあるのだなと感じた。彼がこのゲームにはまった一つの大きな理由として人と対戦するゲームだからという理由がある。大会や宅オフでも実際に隣に座りながら一緒に一つのゲームをする。人と関わるのが好きな彼にとってスマブラは手段でしかなく、仲良くなるコミュニケーションの方法であったということなのである。スマブラは彼の中で、ほかのどのゲームより人とのつながりが意識できるものなのだろう。その考えがあるからこそ、仕事が忙しくなり、前のようにできなくなったとしてもそんなに苦しくなく、今も変わらず土日には楽しく友達とやったり、知らない人ともつながったりすることができるのであろう。

「最後にスマブラをやっていて得られたものと失ったものは何かある？」と、彼が大学生活を費やしたものに何が得られたのか単純に興味がわいた。彼はテンポよく「得られたものは、友達とスマブラの強さ、失ったものは時間かな」と答えた。その答えは思いのほかシンプルな答えだった。しかし、彼はほかにやりたいこともなかったらしく、そこに後悔の色はみじんもなかった。

久しぶりに会ったということもあり、話が脱線し時にはカフェにそぐわない大きな声を出してしまうこともあったが、流れるBGMが少しは緩和してくれたのではないかと思う。私は、彼が大切にしたいことをうまく選べていたことにほっとしたとともに、何か一つのものにハマっている彼が依然として生き生きしているように見えた。

当たり前が失われた生活の中で

坂口　茉優

「久しぶり。まゆ、髪長くなったね」。

画面越しの私を見るなり友人のMは言った。それもそのはず、彼女と顔を合わせるのは実に1年弱ぶりだ。私は2年生の前期の間、交換留学で北京から首都大へやってきた中国人であるMの日本語学習や日常生活のサポートを行うチューターをしていた。Mは日本語の通訳として働くことを目指しており、日本語が非常に堪能であるため、会話は日本語で問題なくやり取りができた。半期という短い期間であったが、時間を見つけては一緒にご飯を食べたり、二人で沖縄旅行へ行ったりとかなり濃い時間を一緒に過ごしたと思う。このような付き合いがあり、私は2年の春休みに北京への旅行を予定していたが、新型コロナウイルスの世界的な流行により断念せざるを得なくなった。そこで、このような渦中において北京在住の彼女がどのような日々を送っているか気になったため、Zoomを介してインタビューすることにした。

インタビューを行ったのは2020年6月18日。前日にWeChat（LINEの中国版のようなアプリ）でしたやりとりを確認するように「もう今日から夏休みなんだよね？」と尋ねると、「そうだよ、昨日試験終わったばっかり」とMはすっきりした表情で答えた。どうやら彼女の夏休みは約2か月半もあるらしい。「長いでしょ」と嬉しそうに笑う彼女だが、「でも冬休みから今までずっと家にいるから、そんなに夏休み気分じゃない」とぼやいた。中国でコロナウイルスが流行し始めたのは2019年12月以降であるため、Mはもう半年以上も自粛生活を続けている。

「また北京で感染者増えてきたよね」。「そうだね、第二波がでてきた。それがちょっと厳しいね。なんか、もともと9月は普通に（対面での：筆者補足）授業が始まると思ってたけど、また第二波がくるって…なんかショック」。

6月中頃に北京で集団感染が起こり、北京は今まさに第二波の真っただ中である。第二波の流行中心地となったのが、北京市最大の食品卸売市場であったため、外出して買い物をするということが厳しくなった。そのため、野菜などの食料品や生活必需品等は、割高にはなるがネットで購入しているという。また、第二波の発生以前は気軽にマックなどのデリバリーを利用していたが、今では配達員からの感染懸念があることから、デリバリーすらも利用できなくなっている。

「自粛生活の中で何が一番つらい？」「そうだね、うちの両親はちょっと第二波来る前に精神が緊張しすぎて。毎日アルコール（消毒：筆者補足）とか。ちょっとやりすぎみたいな感じになっちゃって。だから第二波来る前に、私の友達は外にショッピングとかしてコロナ全然怖くないと思っていたと思うけど、うちの両親はそう思ってなかったし、家から出なくて。友達はみんな外で遊んでいるのに。ちょっと寂しいと思った」。

Mの家族はコロナウイルスを重く受け止め、感染対策を徹底しているように感じられた。しかし、すべての人が同じようにコロナに対する恐怖感を覚えているわけではない。周囲では夜に飲み会をする社会人も見られるという。このような自分の生活と周囲とのギャップが彼女を苦しめる。

つらそうなMを見て、明るい話題に変えようと「なんか楽しい予定とかはある？」と話を振ると、「楽しい予定…」と彼女は少し考えこんだ。しばらくして、「あっ！」と思い出したような声を上げ、笑いながら「悲しい予定言ってもいい？」と言い、次のように続けた。「予定ともいえないかな。4月嵐の北京コンサートあるはずだったじゃん。それ無くなったのがすごく寂しいの。寂しいし悲しいしもうしんどい」。

Mは嵐の大ファンである。インタビュー日の前日（6月17日）は、推しメンである二宮和也（ニノ）の誕生日であり、部屋の中をニノ仕様（壁にニノの写真をはりまくる等）にしてお祝いするほどである。そんな彼女にとって、大好きなグループの残り少ない活動が減ってしまったことはかなり大きなダメージであったのだろう。その落ち込みようが表情や口ぶりから伝わってくる。そんな中でもなんとか楽しい予定を考えようとするM。「そうだ、うちのお母さんは料理がうまいから毎日その料理を食べるのも唯一の幸せなのかな。（中略）だから10キロも太っちゃった（笑）」。

中国の大学生は、学生寮に入るのが一般的であり、4－8人の学生が一つの部屋で一緒に暮らす。Mは地元の大学に通っていたが、校内の学生寮に入り、週一回実家に帰るという生活を送っていた。寮には台所がないため、普段の食事は学食やデリバリーで済ますことが多かった。しかし、コロナを機に実家に戻り、温かみのある母親の手料理を毎日食べられるになった。これはコロナによって当たり前のことが失われている今、当たり前のように思っていたことのありがたみや幸福さを強く実感できるからこそ、出てきた言葉なのだろう。

コロナが収束し「当たり前」が戻ってきたら、また会おうと誓った。

視点が変わるだけで開けた世界

圓明　ひかり

Aは私の中学時代からの友達で、現在地下アイドルと大学生活を両立している。進学校に通いながらも「アイドルになりたい」という夢を抱いていたAは、高校時代からいくつかオーディションを受け、最終的に浪人期間中にあるオーディションに合格した。その後アイドル活動をしながらメディア関係について学べる私立の大学進学を決め、アイドルと大学生を両立しながらもうすぐ1年半が経つ。

インタビューのお願いをすると二つ返事で承諾してくれた。日にちを改め、地元のカフェに行き、いつものように他愛ない話をしながら小さなケーキを食べ終わったタ

イミングで、インタビューを始めた。いつも自分を表現しているだけあってか、饒舌かつ具体的に話をしてくれた。

そもそもあまり前向きな性格ではなかったAのアイドル活動は、「私を通して、（こんな私でも変われるのだから：筆者補足）どんな女の子でも可愛くなれるんだぞという勇気を与えたい」と思ったことから始まる。劣等感との戦いからのスタートであった。そう意気込んでいたものの、アイドルを始めた最初の1年は、努力が直接結果に結びつかない理不尽さや、明らかに自分のファンの数が少ないことに対する焦りと不安に駆られていた。当時の悩みについては、「いやー前までは揺らいでたよ。辞めたいと思ってたしずっと落ち込んでた」と、冷静に笑いながら話していた。地下アイドルの世界で1年という期間は重要らしい。1年以内に辞める子はとても多く、1年を乗り越えるとその後長く続けられる子が多いそうだ。

「それまでファンのことが見えてなかったんだよね。1年経って、心に余裕ができてからやっと見えた。（中略）ファンの人たちと話してたりすると、〇〇ちゃんと話すと元気になるって言ってたり実際に身体的に元気になる人って結構いて、『あ、アイドルって何かを発せられてるんだな』って感動する。びっくりした」。「アイドルがもつ力みたいな？」「そうそう。だからアイドルってその人たちにとっての希望なのかなって思うようになった。（中略）このグループに来て僕は人間性がまるごと変わったんだよねって言われたり」。

生き生きと自信あり気に、「希望」という言葉を強調して話していた。「ファンのことが見えるようになった」とはどういうことなのか、具体的にどのように変わったのかと聞くと、少しの沈黙の後、言葉を選びながら慎重に語ってくれた。「なんかね。うーん。反応が全てじゃないってわかった。すべて表に出るわけじゃない。反応をしない＝嫌い、ってわけじゃないし、かわいいなーって思ってても それを表に出さない人もたくさんいるってことを知ったんだよね。（中略）だから数では測れない」。

数多く開かれる握手会やライブ後のファンとの交流を通して実際にファンの話を聞き、一人一人の可視化できない気持ちや思いを知り、数にこだわり過ぎるのをやめた。そもそも数しか見ずに今自分についてくれているファンを大事にしないのは失礼だ、と気づいたのだ。

「あとなんていうか、ファンの人とは対等な立場だと思って。（中略）バランス感って大事だと思うんだよね。ギブ＆テイクというか」。ファンとアイドルである自分、どっちかを上にしてはいけない。ファンを上だと思いすぎたら一つ一つの言動に振り回されて自分を見失うし、自分を上にしておごり高ぶったらファンはつかない。ファンの応援したいと思う気持ちと、アイドルの満足してもらいたいと思う気持ちで成り立つ、ギブ＆テイクの関係を築くようにした。

「そのバランスって意識して取ろうとしてるの？」「うーーん、たびたび『でも』って思うようにしてる。自然とバランスを取るというか考えていくうえで均衡を取り戻

す。多分その作業を怠ると取り返しつかなくなる」。

Aは、数ではない一人一人のファンを見るようになって初めてこの発想を抱くようになった。もらったお金に対して最大の付加価値を与えるように努力することで、「等価交換を果たすぞ」というモチベーションの保ち方を確立したのだ。Aは一つ一つ言葉を紡ぐような丁寧な語り口で続けた。

「結局周りどうこうじゃなくてその過程を自分がどう思うかだよね。気持ちのビジネスだから『そんなに安くていいの？』ってならなきゃだと思うし、そうなれてるか、なろうとしているかってことが一番重要」。

「一人一人のファン」に視点を向けるようになってからあらゆる考え方がガラッと変わったAは、すごいでしょと言わんばかりの清々しい表情で「意識してるわけじゃないのに、皆に変わったねって言われる」と話した。私の目には、自分の変化を楽しみ、変われたことに誇りを持つAの姿が映った。アイドルとは「希望」だと即座に明言したAには、以前のような劣等感や理不尽さに悩む影は全くなかった。

地元としての東京

松本　大輝

私が上京して約2年経ち、自分の地元の良さも見えるようになってきた。そんな中、私は地元という言葉と縁遠いように感じる東京出身者は地元をどう感じているのか気になった。2020年6月18日。社会状況を鑑みオンラインでのインタビューを行うにあたり、私のバイト先の友人Aさんは録画録音を快く許可してくれていた。画面録画を始めようとすると、録画には課金が必要と判明し、タブレット画面をスマホで撮影するという奇妙な記録の方法で始めさせてもらうことにした。

「地方ってどんなイメージ？」私はずっと八王子に住み続けてきたAさんに、こんなぼやっとしたことを最初に問いかけた。「えぇ、なんだろう…、ち、地方って言われて？」困ったように笑いながら彼女はこう続けた。「ん～、なんかでも東京より人が少ないイメージ…かな」。これまで地方の暮らしなどあまり想像してきたことがないという彼女は、自分の中の“地方”という言葉のイメージについて率直に述べてくれた。

「大学入って地方の人とおしゃべりする中で、地方ってこんななのかなってイメージの変化とかってなんかあった？」「でもなんか勝手に、すごい失礼な話なんだけど…」、彼女は感じていることについて、少し遠慮がちな様子を見せたため、「全然全然！」と私が気にすることはないというように遮ると、彼女は顔をほころばせつつ、続けた。

めちゃめちゃ田舎、みたいなイメージあっても、なんか、意外となんか、なんていうの、都会ではないけど都会ぐらい生活便利なとことかあったりとか…あとやっぱり地方の、なんだろう方言とか、あとなんだろうな…特産物とかの話を聞いてるとなんかそういう自慢できるところがたくさんあるのいいなって思った。東京特にないから。

「特にない？」「ない、あんまり自慢できるってなるとないかも」。

昨今、博多弁などの方言がもてはやされ、その人の特徴として方言がプラスにはたらくようになり、標準語を話す東京の人に方言が魅力的に映るのはうなずける。だが、東京に自慢できるものがないというのは地方から来たものとしては否定したくなる。新宿、池袋、渋谷…誰もが知っているような大都市がひしめきあい、なにもかもが揃っている。自慢などしようとすればいくらでもできる気がする。

「地方の子たちの話聞いてもやっぱ東京から出て暮らしてみたいなって、思ったりしなかった？」と聞くと彼女は、「うん」と即答し、「なんか、遊びに行きたいなとは思うけど、やっぱり東京の方がなんか便利なイメージっていうか、まぁ実際交通とかもなんかどこにでも行けるから、なんかずっと住むなら東京かなって思う」と続けた。

「東京に暮らしてて今なんか物足りないなって思うこととかある？もっとこれがあればとか」。「でもなんか、このへんはそんなでもないけどなんか自然があった方が落ち着くから、もっと自然あった方がいいなとは思う」。

彼女は建物が並ぶ東京の窮屈さが嫌だと言うが、それでも進学を機に東京から離れようと考えたことはない。また大多数の人も彼女同様に東京での進学を選んでいたという。「東京の大学に行きたいっていう理由で多いのとかあった？」「あ～なんだろう、でもやっぱり地元から離れたくない人が多かったかな」。「みんな地元大好きみたいな？」「なんだろう…、あんまり遠くに行くとここの高校とかの地元の友達とかもなかなか会えなくなっちゃうし、（…）東京の生活の便利さにみんな慣れちゃってるから、なんか地方で暮らすのが不安とかいう人もいたかも」。

少しの脱線を挟み、「地元好き？」と私が尋ねると、「うん、地元は好き」と彼女は迷わず即答した。「どういうところ好き？」「え～、どういうところ？」と言うと、彼女は少し考え、時折詰まりながら答えた。「あ！でも、なんか東京の便利さもありつつ、なんだろうそんな新宿とかみたいになんかビルがいっぱいあるとかじゃなくて、ちょっと程よい感じ？なんていえばいいの、ちょっと程よい感じじゃん？」

具体的に好きな点を挙げろと言われると難しいが、地元が好きであるということは彼女の中で確かなことらしい。「なんか田舎っぽいわけでもないけどっていう中間地点あたりだから、なんか、なんだろう…すごい疲れるわけでもなくっていうところがちょうどいいかなって思って、結構気に入ってるかな」。

これまで私は、地元愛とはその人が地元について“誇り”に思うことだと考えてきた。また、地元の好きなところを挙げろと言われたら、食べ物や場所など具体的なものを雄弁に語る人が多いようにも思う。

自慢できるものはないが、その便利さゆえ外へ出て暮らそうと考えたことはない。何が好きなのかと問われると難しい、しかし地元が好きであることは自覚している。そんな彼女の“誇り”とは違う地元への愛着は、これまで見てきたものとは違う地元愛のかたちを私に見せてくれた気がした。